colors

湊　翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｏｌｏｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ５９７０Ｙ

【作者名】
湊　翼

【あらすじ】
１６歳の誕生日。
美穂奈（みほな）は政略結婚させられる為に、部屋で軟禁状態にあった。
そこで、毎年誕生日になると現れる不思議な本を見つける。
いつも何も書いてないその本に、今日は金色に光る文字が浮かび上がった。
惹きつけられる様にその文字を目と指で追った美穂奈は、最後に文字が浮かび上がった瞬間、光に包まれ、気付くと知らない場所に立っていた。……各題名にあまり意味はないです。題名センスない

ので、適当に付けてます。

プロローグ

水狼（ヴォルフィン）が鳴き、ラズは読んでいた本から視線を上げた。
水狼は気性が荒い方だが、こんな風に鳴く事はあまりない。
森で何かあったのだろうか？
不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。
首を一度だけ傾げ、ラズは視線を本へと戻した。
緑の革表紙に金の縁取りがある分厚い本。
ページを開けば、そこは真っ白な空白ばかりが続く。
だが、ラズはその灰緑色の瞳でそこに何かが書かれているかの様に凝視した。
細く、長い指が、その真っ白いページをそっと撫でると、うっすらと文字が浮かび上がった。
まるで、ラズの指から紡がれているかの様に現れるその文字は、金色に輝きゆっくりと白いページを埋めていく。
ゆっくりゆっくりとページを埋め、最後のページでその光はさらに大きく膨み…。
そして、弾けた。

■■■■■■◆■■■■■■■◆■■■■■■

出来れば今日という日を迎えたくはなかった。
と、自室に閉じこめられた美穂奈（みほな）は本気でそう思っていた。
今日。
そう、美穂奈は今日で１６歳になるのだ。
１６歳の誕生日、それは今まで行ってきた誕生日とは違う響きを持つ。

「１６歳…。嫌な法律よね。」
呟いて、美穂奈はベッドに突っ伏しる。
そう、１６歳。
日本では、女は１６歳、男は１８歳になると親の同意さえあれば結婚が許されるのだ。
そう、親の同意さえあれば、政略結婚させる年齢という訳だ。
「お義父様とお義母様の為だけど…。」
美穂奈はこの家の本当の子ではない。
小さい頃、両親を亡くし、どうする事も出来ずただ呆然と佇んでいた美穂奈を助けたのが、この家の夫婦であった。
だから、美穂奈は、この家に対して凄く恩を感じていた。
多少の事なら頑張れる。
勉強も、運動も、礼儀作法だって、一生懸命に頑張った。
彼等の期待に応えられるよう、一生懸命に。
だけど…。
「結婚かぁ…。」
呟いて、思い出す。
なんともつまらないあの婚約者の事を。
そう、あれは初めて顔を合わせて、庭で散歩した時の事だ。
彼はこう言った。
「あなたの様な素敵な人が僕のお嫁さんで本当に良かったです。あなたとなら、きっと良い家庭を築けると思います。」
と…。
何とも型にはまった定型文。
庭に出る前に少し「ご趣味は？」「お茶を少々」という、やはり型にはまったやりとりを少ししただけで、私の一体何がわかると言うのか。
どこをどう見て、何を基準として、私が素敵な人なのか。
そう思うと、吐き気がした。
そして、この人との先が見えてしまった。

型にはまった、つまらない結婚生活。
そんなものを強いられ一生生きていくのかと思うと、急に嫌になったのだ。
…だからと言って、逃げ出す勇気などないのだけれど。
固く閉ざされた部屋のドアを見て、美穂奈は自嘲気味に笑う。
そう、逃げる勇気なんてないのだ。
なのに、あの両親は一体私がどこに逃げると思ったのだろう。
逃げる場所なんて、どこにもないのに…。
ジッとしてると、時計の音が煩わしく、ゴロンゴロンと無意味にベッドの上で転がる。
「痛っ！」
と、何か固い物にゴツンと頭をぶつけ、美穂奈は転がるのを止め、体を起こした。
無駄にふかふかなこのベッドの上に、一体何なんだと思った私は、ソレを視界にとらえビクリと体を震わせた。
赤い革表紙に、金の縁取りが付いた分厚い本。
「今年も…、なの？」
呟いて、美穂奈はソレにそっと手を伸ばす。
ずっしりとした重みが、掌と心の奥底に刻まれる。
指先でそっと撫でてから、美穂奈は視線を巡らせる。
今、この部屋には自分しかいなく、そして、唯一の出入り口であるドアはやはり固く閉ざされている。
そうすると、やはりこの本は…。
そっと、ページを捲ってみる。
白く眩しいページが、どこまでも続く。
かなり分厚い本だが、さすがに何も書いてないとパラパラと繰るだけで終わり、あっと言う間に最終ページに到達した。
「やっぱり、あの本なのね…。」
何も書いてない。
何も書いてないからこそ、美穂奈はこの本が毎年見ている物と同じ

だと判断出来た。
何も書かれていない不思議な本。
毎年、美穂奈の誕生日になると突然現れる不気味な本。
「仕方がないわね。」
呟いて、美穂奈はその本をそっと枕元に置いた。
ちなみに、不気味だからと投げ捨てたり燃やしたりしても、いつの間にか戻ってくるので、余計に気味が悪い。
それならば、今日という日が終わるまでどこかその辺に置いておく方が幾分かマシである。
今日が終われば、この本はやはり知らない間に消えているのだから。
その時、外から犬の遠吠えが聞こえ、美穂奈は顔を上げた。
滅多な事がなければ鳴かない様に躾られている番犬が鳴いている。
珍しい、泥棒でも入ったのだろうか？
不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。
首を一度だけ傾げ、美穂奈は視線を部屋の中へと戻した。
瞬間、ビクリと体が震える。
枕元に置いてあった、あの赤い本が、ひとりでに表紙を開いたのだ。
風ではない。
というか、もし風が吹いたとして、革表紙に金の縁取りがあるあの本の表紙を捲る事なんて無理だろう。
「な、何？」
恐る恐る近付くと、真っ白いページが微かに光っている。
目をこらし良く見れば、それは金色に輝く文字、…の様なものだった。
正直読めない。
つまり、日本語と英語ではない。
フランス語でもないと思う。
…アラビア文字？
最初に抱いた感想は、ソレだった。
模様の様な、でも規則性のある文字の様な、そんな金色に光り輝く

不思議な文字が白いページを埋めていく。
「綺麗…。」
気味が悪いとか、怖いというよりも先に、そう思った。
金色の光は、小さな光の粒子の様で文字の周りをキラキラと彩る。
そっと指を伸ばし、触れてみるが、何もない。
美穂奈の指にその粒子が付くわけでも、感触がするわけでもない。
けれど、美穂奈はなんとなく、その文字を指でなぞった。
ゆっくりと進むその光を、美穂奈も同じ速度でゆっくりと後を追う。
点字をなぞるかの様に、そっと。
どれくらいそうしていたのかは分からない。
ただ、この追いかけっこもようやく終わりが見えてきた様だ。
最後の白いページ。
そこを、今までと同じように金色の文字は進み、埋めていく。
ゆっくりと、美穂奈が最後の一文字を撫でた瞬間、その光は大きく膨らみ…。
そして、弾けた。

少女と男

「どうしよう。」
やってしまった、と美穂奈は頭を抱えていた。
「いや、だって急に出てくるから…。」
言い訳がましく呟いてから、美穂奈は辺りを見渡し、もう一度頭を抱えた。
木の温もりを感じられる簡素な小屋。
ついさっきまで、自室にいたのに…、どうして?とか、そんな事よりも、だ。
美穂奈は目の前で倒れている男の人を見た。
この男の人が突然目の前に現れた、そう思っていたが、この状況。
ここは美穂奈の部屋でも、美穂奈の家でも、もう一つ言えば、窓の外の景色からして、美穂奈の住んでいる街でもなさそうだ。
考えるまでもなく、美穂奈が、美穂奈が突然現れたのだ。
この男ではなく、美穂奈が突然。
なのに。
美穂奈は手の中にある、あの赤い本をギュッと握る。
急に見知らぬ男が出現したと勘違いした美穂奈は、手近にある本で男を思いっきり殴り倒してしまったのだ。
死んではないだろうが、何千ページもある分厚い本の、角。
しかも、金の飾り縁のところで、本の重みに従い腕を振り下ろし殴ってしまった。
しばらくは目覚めそうにない。
美穂奈は一瞬の間の後、男に手を合わせた。
「ごめんなさい。」
一度、しっかりと頭を下げてから、美穂奈は改めて男を見る。
「…変わった色。」
灰緑の髪に、美穂奈は小さく呟いた。

そういえば、一瞬しか見ていないが、今は閉じられている瞳も同じ色だった気がする。
「ふぁ…。」
美穂奈は大きくあくびを1つ漏らす。
何だか無性に眠たい。
思いっ切り運動した後の様な気怠さが、睡魔を連れてやってくる。
美穂奈はそれを追い払うように一度頭を振り、これからの事を考えた。
まずは、この人が目を覚ましたら謝って、それからここがどこなのかを聞こう。
で、場所が分かったら、家に連絡してかえ…。
そこまで考え、美穂奈は首を傾げた。
帰って、どうするんだろう。
眠たく、重い頭で考える。
帰ったって待ってるのは、つまらない婚約者様と、恩は感じていても本当の親だとは思えない義両親。
つまらない結婚生活に、終わったも同然の人生。
帰って、どうするの？
どうすれば良いの？
眠いせいだろうか、頭がしっかりと働かない。
少し、眠った方が良いのかもしれない。
眠れば、少しは、マシな打開策が見つかるかもしれない。
美穂奈はそう結論付けると、体を小さく丸め、そのまま床の上に体を預けたのだった。

■■■■■■■◆■■■■■■■◆■■■■■■■

「どうしよう。」
何が起きたんだ、とラズは頭を抱えていた。
「急に殴られて、えっと…。」
気絶する前の事をゆっくりと思い出しながら、ラズは床で丸くなって寝ている少女を見て、もう一度頭を抱えた。
すやすやと安らかな寝息を立てて眠っている少女。
ついさっきまで、本を読んでいた。
長年かけて解読し読み解いていた本を読み終えてしまい、達成感と明日から何をしたら良いんだろうという虚無感に胸の中が綯い交ぜになって…とかそんな事よりも、だ。
ラズは、目の前ですやすやと気持ちよさそうに寝こけている少女を見た。
突然目の前に現れた見知らぬ少女。
その子は、ラズに何か言うでもなく、聞くでもなく、いきなり殴ってきた。
何か固くて重い物で。
相手を気絶させ、その後に家の中を漁り金目の物を盗んでいくなら強盗だ。
気絶させ、トドメをさせば、快楽殺人者か殺し屋かもしれない。
が、相手を殴って気絶させた後に、その場で丸まって寝てしまうのは、いったい何だ?
それは、ラズが知る知識を総動員させても、何にも属さない、意味不明な行動であった。
ラズは首を傾げた。
「何がしたかったのかな?」
呟いてから、ラズは改めて少女を見る。
ふわふわとウェーブのかかった茶色の髪が、床に散っている。
床の木の色と良く似ているから、踏まないようにしなければ。
年々度が合わなくなってきている眼鏡を押し上げ、そう思ったラズ

は、ズキリと痛む頭に一瞬眉をしかめた。
…そういや、何か固く重い物で気絶する程殴られたのだった。
忘れていた訳ではないが、目の前で眠るこの少女のせいで考える暇がなかった。
一体、何で殴られたのだろう？
少女の腕は細く、大きな武器を振り回したりは出来ないだろう。
それに、そんなものを隠す場所もないし。
この小屋に、何かを隠せるだけのスペースも死角もないのは、小屋の持ち主であるラズが一番知り尽くしている。
だとすると、少女が持てるだけの大きさ…あ、もしかしてこれか？
ラズは、少女が大事そうに抱えている本を見た。
長年、自分が読み解いていた、緑の革表紙に金の飾り縁が施してある、あの分厚い本。
「そっか、あれで殴られたのか。そりゃ、あれだけ分厚い本で殴られたら気絶ぐらい…あれ？」
そこでラズは何か違和感を感じる。
少女が抱きかかえている本。
それは、たしかに自分が毎日毎日見てきた本なのに、何かが違う。
「あ…、色…。」
呟いて、確信する。
そう、ラズの知ってる本は、緑の革表紙に、金の飾り縁。
だが、少女が抱えている本は、赤い革表紙に、金の飾り縁。
色が、違うのだ。
「だとすると、やっぱり中身も違うのかな？」
ラズは、そっと少女へと手を伸ばす。
その、赤い本の中身が知りたくて。
やはり、あの緑の本の様に、パッと見は、ただの白紙の本なのだろうかと。
指先に、本が当たる。
そっと撫でれば、ザラリとした革の感触。

緑の革表紙と同じ感触だった。
瞬間、少女の瞳がゆっくりと開いた。
髪と同じ、濃い茶の瞳がこちらに向けられ、ラズをとらえた。
あ、ヤバイ。
ラズが咄嗟にそう思ったときには既に遅かった。
「…キャーッ！」
少女は先程と違い、そう叫んだ後、ラズの頬にあの赤い本を叩きつけたのだった。

疑いと自己紹介

「大変、申し訳ございませんでした。」
美穂奈は勢い良く頭を下げた。
目の前には、赤く腫れ上がった頬を押さえている男。
美穂奈が放った2発目は、不幸中の幸いというのか、表紙の部分が頬に当たった為、男は気絶せずに生きている。
生きてはいるが、機嫌は最悪であった。
それはそうだろうと美穂奈は思う。
もし自分が逆の立場であった場合、美穂奈の機嫌も最高潮に悪いだろうから、このなんとも言えない微妙な空気には納得している。
が、この状況については何1つとして、納得も理解もしていなかった。
なので、唯一の情報源であろう彼がこの状態では、美穂奈もお手上げである。
早く機嫌を直してはくれないだろうか。
そんな希望の元、頭を下げたまま、チラリと男を盗み見る。
目を覚ました彼の目は、やはり髪と同じ灰緑色だった。
日本人にあるまじき不思議な色。
「……で?」
ビクリ、と、美穂奈は肩を揺らした。
ずっと無言で怒っていた目の前の男が、口を開いたのだ。
「え?」
美穂奈は顔を上げて、首を傾げた。
何を聞かれているのか、わからなかったからだ。
「君は一体、何がしたいの?」
「…はぁ?」
問われた言葉に、美穂奈は盛大に首を傾げた。
何がしたいって…。

美穂奈が理解出来ずに呆然としているのを横目に、男は続けた。
「あいにくと、この家には価値のある様な物はないよ。それに、僕は特に恨まれる様な事をした覚えもない。」
「……はあ。」
美穂奈はとりあえず頷く。
たしかに、この小屋は簡素でパッと見、価値の有りそうな物はない。そしてこの男も、誰かに恨みを買うよう感じには見えなかったからだ。
「君の目的が何かは分からないが、とにかく、人の家の床で寝るのはどうかと思う。…出ていってくれ。」
言って、出口であろう扉を指さす男に、美穂奈は首を振る。
「あの、たしかに、いきなり殴ったり、勝手に寝てしまったりしたのは謝るわ。でも、私の話も聞いて？」
ここがどこなのかも、何故ここにいるのかもわからない状態で外に放り出される訳にはいかない。
美穂奈は必死で男に頼み込んだ。
「私、ここがどこかも、いつの間にこんなところにいたのかもわからないのよ。本当よ？突然家の中に上がり込んだりして、あなたの気分を害したのは謝るから、少しだけお話をしてくれない？」
「…ここがどこかもわからない？何、君、記憶喪失とかでも言うの？」
驚いたように聞いてくる男の言葉に、美穂奈は首をふるふると振って答えた。
「違うの、そうじゃないの。名前だってちゃんと言えるもの。私は美穂奈よ。美穂奈…、えっと…。」
そこで口を噤み、美穂奈は一度何かを考えるように視線を彷徨わせた後、男を見て困った様に笑った。
「だからね、その…。あなたの名前も教えてもらえると助かるのだけれども。」

■■■■■■■■◆■■■■■■■■◆■■■■■■■■

ちょっと苦しい繋ぎだったかしら。
そう思いながらも、美穂奈は男から聞き出した情報を頭の中で反芻する。
男の名前は、ラズ＝サプレーン。
美穂奈よりも７つ年上の２３歳。
ここは彼の家で、都心部から少し離れた森の中にあるらしい。
婚約者との結婚に逃げ出した形になっている自分が、あの家の姓を名乗って良いのか、咄嗟にそう思い言葉が出てこなかった美穂奈は、苦し紛れに男の名前を聞いた。
元々聞くつもりではいたが、もう少しきちんと自己紹介をし、美穂奈の事を知ってもらった上で聞くつもりだった。
出会い頭いきなり殴って、こっちの印象は最悪だろうから、少しでも印象が良くなるようにと考えていたのに…。
だが、美穂奈のあんな無礼な聞き方に、男は更に怒ったりなどはせず、小さく溜息を吐いた後、上記の事を教えてくれた。
ほとんど単語のみの受け答えだったけど、ちゃんと答えてくれるあたり、良い人なのかもしれない。
「あ、えっと。ラズさん。」
「ラズで良い。僕も、ミホナって呼ぶから。」
年上を呼び捨てにするのはどうなのだろうとは思うが、本人がそう言うのなら出来るだけ要望には応えよう。
「じゃあ、ラズ。」
「何？」
美穂奈の問いに、ぶすっとしながらも答えてくれるラズは、やはり

優しいと思う。
「ラズの髪と瞳って、とても珍しい色ね。何人なの？」
美穂奈がそう問えば、ラズは一瞬不思議そうな顔をした後、すぐに眉をしかめ首を傾げた。
「何人？…オーラー出身だけど？」
「オーラー？」
今度は美穂菜が首を傾げる番だ。
聞いたことない地名だ。
元よりそんなに地名に詳しい訳ではないけども。
日本国内の地名だって、全部わかる訳ではないのだし。
「えっと、それはどこかしら？アメリカ？イギリス？ロシア？」
「アメリカ？イギリス？ロシア…？ミホナ、君が何を言っているのかわからないんだけど？」
「え…？」
不思議そうなラズの顔に、美穂奈も同じ顔で返した。
今、美穂奈は比較的有名な国名を口にしたつもりだ。
なのに、何故ラズは知らないのか。
「ここは、日本……、ううん。地球よね？」
当たり前だと思いながらも、美穂奈は聞いた。
ラズは美穂奈の問いに、何当たり前の事を聞いてるんだって笑ってくれれば良い。
なのに。
「チキュウ？…ミホナ、君が何を聞きたいのかは分からないけど。ここは『ｃｏｌｏｒｓ（カラーズ）』の中心とも言われているオーラー都市の外れにある森の小屋の中、だよ。」
「カラー…ズ？」
ラズの言葉に、美穂奈ただ呆然と呟く。
ｃｏｌｏｒｓ（カラーズ）。
それが、この世界の名前。
この世界…。

そう、私の知っている世界とは違う、別の世界。
異世界の、名前なのだと、それを理解するのに、私は、少しの時間を要した。

転移魔法と魔法級

ラズから聞いた言葉を、美穂奈は理解すると同時に、今目の前にいるラズをどう陥落するかに頭を悩ませていた。
良くは分からないが、美穂奈は今、異世界にいるらしい。
理解し難いが、それは分かった。
一瞬目を瞑った後に、急に知らない家の中にいたのだ。
それは揺るぎようがない事実。
受け入れよう。
でだ、問題は大きく分けて2つ。
どうやって元の世界に戻るのか、と、どうやってここで暮らしていくか、だ。
元の世界に帰ったって良い事は何もない。
つまらない婚約者様との結婚が待っているだけなのだから、帰らなくてはいけない目的はあまりなかった。
なので、すぐに帰れなくても、美穂奈的には何も困る事はなかった。
ただ、残る問題の後1つ。
ここで、どうやって暮らしていくのか、だ。
すぐに帰れない、または帰らない場合、美穂奈はしばらくここで暮らしていかなくてはいけない。
仕事があるなら、働いて普通の暮らしをおくるのだけれど…。
ただ、美穂奈はこの世界で戸籍もなければ、頼れる親戚知り合いの類もいない。
この世界に戸籍があるのかどうかは知らないが、住民登録をしていなければ就職するのは難しいだろうし、万が一働けたところで、親戚や知り合いがいなければ、当面の住む場所や食事などの生活費に困る。
と、すればやはりラズをここでなんとしてでも落としておきたかった。

幸いラズは見た限り一人暮らしの様だし、何より出会い頭いきなり本で殴って気絶させられたのにもかかわらず、今現在美穂奈とこうやって話をしてくれる優しいお人好しだ。
美穂奈はゴクリと息を飲んだ。
この交渉は、失敗出来ない。
「良くわからないけど、君はこの街の出身じゃないって事が言いたいの？」
「ええっと、そうね。とりあえず、私はオーラー出身じゃないわ。」
答えて美穂奈は天上を見上げる。
何て説明すれば良いのか…。
そこまで考え、美穂奈は首を振った。
いや、下手に嘘は言わない方が良いかもしれない。
だって、ここは美穂奈の知っている常識が通じるのかも分からない世界なのだ。
ちょっとした事ですぐにボロが出てしまう可能性だってある。
その場合、信用問題にヒビが入ってしまう。
ただでさえ、美穂奈は信用されていないのだ。
これ以上、その信用値が下がろうものなら、さすがにお人好しのラズと言えど、美穂奈は今度こそこの小屋を追い出されてしまう。
正直に話そうと決めた美穂奈は、少し考えた後小さく息を吐いてラズを見た。
「あのね、ラズ。私の話を、最後まで聞いてくれる？」
美穂奈の真剣な瞳に、どこか投げやりな態度だったラズが姿勢を正した。
「一応、さっきから君の話は聞くように努めているけど？」
「そうね、ラズはさっきから私の話をちゃんと聞いてくれているわ。そうよね…。」
ラズに、というより自分に言い聞かせるようにそう言って、美穂奈は胸に手を当て、大きく息を吸う。
「ラズ。私自身信じられないんだけど、私、この世界の人間じゃな

いかもしれない…。」
「……は？」
少しの間の後返ってきた返事に、美穂奈は大きく頷いた。
「待って、分かってる！ラズの言いたいことは凄く良くわかる！！でも、本当なの！私は、地球って惑星の日本国出身なの。ねぇ、ラズ、あなた地球って聞いた事ある？日本は？ちなみに、私はｃｏｌ（カラ）ｏｒｓ（ーズ）もオーラーも聞いた事ないわ！」
一度声に出してしまえば、不安と疑問の山だらけで、美穂奈はラズが困るだろうと思い無いながらもまくし立てた。
そんな美穂奈に、ラズは頭に手を置きながら待ったをかける。
「ミホナ、落ち着いて。」
だが、美穂奈は首を振った。
「いいえ、待たないわ！それに、落ち着けるはずもないじゃない！！私は、お義母様達に部屋に閉じこめられてたのよ？なのに、目を瞑って数秒後に目を開けたらこんなところにいるとか、あり得ない！普通に考えてあり得ない！！これは宇宙人の仕業だとでも言うの？それとも魔法？どれも非現実的だわ！」
一気にまくし立て、ゼーッ、ハーッと荒い息を吐く美穂奈に、ラズは恐る恐る声をかけた。
「……えっと、ミホナ？」
「…何よ？」
何か反論出来るならしてみなさいよとでも言いたそうにこちらを睨む美穂奈に、ラズはとても言い辛そうに口を開いた。
「…えっと、魔法なら、あるんだけど？」
「……は？」

■■■■■■■◆■■■■■■■■■■■■■■■

魔法。
それは常人には不可能な手法や結果を実現する力のことである。

美穂奈は、ぽかんと口を開けたままラズを見つめた。
「魔法…が、あるの？」
「あるよ。」
さも当然だと言わんばかりにラズはサラッと答えた。
「何、それって物を浮かせたり空を飛んだり？」
「程度によるけど、まぁそんな感じの事は出来るよ。」
真実を、異世界から来た、なんて奇想天外な話を、嘘偽り無くラズに打ち明けておいて良かった、と美穂奈は思った。
この世界に魔法があり、それが当たり前だとされているなら、美穂奈はきっとすぐにボロを出していただろう。
その点では自分を高く評価したい。
「ミホナの世界に、魔法はないの？」
ラズの不思議そうな声に、美穂奈は自画自賛を止めて、頷いた。
「ないわ。物を宙に浮かせたり、人が空を飛んだりは出来ない事はないけども…。」
科学が発達した現代日本では不可能ではないが、魔法の様に何もないところから突然何でも出来たりする訳ではない。
「え、ちょっと待って。魔法があるなら、私がここにいるのも、魔法なの？」
魔法になんか詳しくはないが、転移魔法みたいなのを使えば、そういう事も出来るのではないかと思い、美穂奈はラズを見た。
が、ラズは小さく首を振り、その可能性を否定した。
「んと、なんて言えば良いのかな…。魔法はね、たしかにあるんだ。ミホナの言う転移魔法もたしかにある。けれど、魔法には級（ランク）があってね。一番難しいとされている魔法はＳ級（ランク）と言って、使える人間は

ほとんどいない。次に難しいのがA級、順にB級からG級までの8段階。そのうち、転移魔法っていうのは、この8つの級、どれにも属さないSS級なんだよ。ここまではわかる？」

ラズに言われ、美穂奈ラズに言われた言葉を脳内で復唱する。

魔法と言っても、誰もが簡単に使えるものから、修行を積まなければ使えないような難しいものまである。

美穂奈がここに来ただろう原因の転移魔法はSS級。

そして、S級と呼ばれる高難易度の魔法が使える人間は、ほとんどいない。

「…っと、あれ？ラズ、1つ良いかしら？」

ふと、美穂奈は疑問を感じた。

「どうして、SS級を入れて、9段階にしないの？それに、S級の魔法を使える人間はほとんどいないって…。」

美穂奈はそこまで言って、1つの答えに行き着き、ラズを見れば、ラズは静かに頷いた。

「そう、SS級を使える人は、もういないよ。あまりの難しさに、取得出来る者がいなくて、随分昔に魔法級から外されたんだ。」

ラズの言葉に、美穂奈は絶句する。

転移魔法は今は存在しない魔法。

じゃあ、何故美穂奈はここにいるのか。

転移魔法でないとしたら、どうやってここに来たことになるのか。

「じゃあ、何？魔法じゃないなら、残る可能性は宇宙人？ファンタジーじゃなく、SFな展開なの？」

まさか宇宙人までいるとは言わないわよね。

美穂奈の無言の質問に、ラズは溜息混じりに答えた。

「その可能性を完全に否定する訳じゃないけど、この世界に宇宙人はいないよ。」

「なら、他にどうやって…。」

呟いて、美穂奈は手の中の本に視線を落とす。

赤い革表紙の、金の飾り縁が付いた分厚い本。

いつもは白紙のそのページに、金色の文字が浮かび上がって…。
「……そうよ、本！」
美穂奈ははじかれた様に顔を上げた。
「ラズ！私、この本に金色の文字が浮かび上がって、それを見てたらここに来たの！ねぇ、やっぱりこれって魔法じゃないの？」
美穂奈の言葉に、ラズは思い出したと口を開いた。
「そうだよ。ちょっとミホナ、それ見せてくれないか？君が持ってるその本、僕が持っている本ととても良く似ているんだ。ほら。」
そう言ってラズが見せてくれたのは、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた、分厚い本だった。
「これはね、僕の曾祖父の形見なんだ。」
「ラズの…？」
「ミホナ、君のその本は、一体どこで手に入れたものだい？」
問われて、美穂奈は自分が生まれてからこれまでの誕生日をずっと思い返す。
気付けば、誕生日の日に側にあった。
そして、誕生日が終わればいつの間にかなくなっていた。
それは、いつの頃からだった？
中学生の時から？
小学生の時から？
いや、違う。
もっと前から。
気付けば誕生日の日に側にあったその本は、本当に、美穂奈が気付いた頃には、そこにあった。
物心が付いた頃には、もうすでに。
多分それは、生まれた時からずっとあったのではないかと、その可能性に気付いた美穂奈は、一瞬恐怖を感じて、小さく体を震わせたのだった。

エルドと緑の本

「名は？」
生まれたばかりの我が子を抱いていたモウズは、その声に振り返り、驚いた。
そこに立っていたのは、世界最高峰と謳われた大魔法使いである自分の祖父、エルドだった。
「…ラズです。」
「ラズ、ラズか…。」
エルドはそう呟くと、嬉しそうに顔を歪ませた。
「お前達は魔法の才能がからっきしだったが、この子なら…。」
そう呟いて、エルドはラズを優しく撫でた。
「ラズ。お前なら、きっとこの本を読み解いてくれるだろう、ラズ。」
そう言ったエルドの手には、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた分厚い本が1冊、握られていたのだった。

■■■■■■◆■■■■■■■◆■■■■■■

「僕の曾祖父は、若い頃とても強い魔力を持っていてね。S級（ランク）はもちろん、SS級（ランク）の魔法も少しだけだけど使えたらしい。」
ラズの言葉に、美穂奈は少し驚いた。
何故なら、SS級（ランク）の魔法を扱える人はもういないと聞いたばかりだったからだ。
「ただ、歳と共に魔力は低下していき、晩年はA級（ランク）の魔法を使うの

がやっとだったみたいだけど。」
ラズの祖父、エルド＝サプレーンは若い頃、とても優秀な魔法使いとして有名だった。
ＳＳ級（ランク）の魔法を使える事から、生きる伝説とも呼ばれていた彼は、歳と共に自分の魔力が低下していくのをとても焦っていた。
後継者のラズの祖父もラズの父も、どちらも魔法の才能はあまりなく、Ｃ級（ランク）の魔法しか使えなかった事に、いつも嘆いていたと。
「僕が生まれてすぐ、曽祖父は僕にこの本を渡し、亡くなったそうだよ。伝説と呼ばれた曽祖父が残した本だから、魔法関連の本かと思ったんだけど…。」
そこまで言って、ラズは肩をすくめた。
「読むのに凄い魔力と集中力がいる割りに、中身は普通の小説だったんだよね。曽祖父が何故こんな本を僕に託し、あんなに切実に読み解いて欲しいと言っていたのか分からないぐらいね。」
「本を読むのに、魔法がいるの？」
美穂奈の疑問に、ラズは緑の本を開いて見せてくれた。
「ごらんの通り、パッと見、中身は白紙なんだ。読む時にこの本に魔力を注いでやると、その間だけ文字が浮かび上がる仕組みなんだ。」
何かの暗号かとも思ったけど、多分違うだろうと話すラズに、美穂奈はそっと自分の腕の中にある本に視線を落とす。
赤い革表紙に、金の飾り縁のある中身が白紙な分厚い本。
それが、ＳＳ級（ランク）の魔法を使える大魔法使いと呼ばれたラズの曾おじい様が残した本と良く似ている…なんて、出来すぎている。
そして、魔法だ。
美穂奈はもちろん、魔法なんて使えない。
魔法が本当に実在し、使用されている様な世界があるというのを今知ったぐらいだ。
なのに。
美穂奈は、ここに来る少し前を思い出す。

金色の白紙のページに、たしかに浮かび上がった金色の文字を。
ラズは言った。
魔力を注ぐと、文字が浮かび上がると。
美穂奈は、魔力なんてない。
本に注いでやった記憶もない。
なのに、何故…？
「ミホナ？」
呼ばれて、ハッと顔を上げる。
難しい顔をして黙り込んだ美穂奈を心配してくれた様だ。
「あ、えっと…。」
言い淀んで、美穂奈はそっとラズに本を差し出した。
「ねぇ。私のこの本も、やっぱりその魔力を注いであげると、文字が浮かび上がるのかしら？私は…、魔法なんてもの使えないから、ラズさえ良ければ、この本を読んでみてくれないかしら？」
「え…？じゃあ、その本も白紙なの？」
ラズの問いに、美穂奈はこくりと頷く。
「えぇ、白紙よ。何も書いてない。でも…。」
ここに来る前、私は確かに見た。
金色の文字を。
「そう言えば、ミホナはここに来る前に、その本に金色の文字が浮かび上がったって言ってたよね…。」
呟いて、ラズは少し考える素振りを見せた。
そして、美穂奈を見て、苦い顔をする。
「ミホナさえ良ければ、僕もその本は気になるし、読んでみたいとは思うんだけど…。今日は、ちょっと無理かな。こっちの本を読むのに、魔力使い果たしちゃって…。」
そう言って、ラズは緑の本を掲げて見せた。
「いつもは少し余力を残しておくんだけど、後少しで読み終わると思ってつい使い切っちゃったんだよね…。2～3日あれば回復するけど…。」

「2～3日…。」
言われて美穂奈は、当初の目的を思い出す。
ラズが言い淀んでいる原因は、多分、ラズが回復するまでの2～3日、美穂奈はどうするの？と聞きたいのだろう。
そして、美穂奈はどうやってこの世界に来たかではなく、どうやってラズを陥落するかを悩んでいたのだ。
「忘れてた。」
眉間に指を当て、美穂奈は呟いた。
異世界ってだけで脳内キャパオーバーだってのに、魔法とかなんか色々有りすぎて、つい失念していた。
まぁ、でも、これでラズには頼みやすくなった。
とりあえず、2～3日はラズが本を読みたがってるんだし、それをエサに泊めてもらえないか交渉しよう。
「ラズ。」
「ごめん、無理だから。」
交渉しようと、顔を上げて名前を呼べば、ラズから間髪入れずにお断りの返事が返ってきた。
「……私、まだ何も言ってないよ？」
「ああ、うん。でも、無理だから。」
「……。」
今までお人好しすぎるぐらい、美穂奈の話を真面目に聞いてくれていた人とは思えない程の否定っぷりである。
女の子を1人、知らない土地に放り出したりする様には見えないんだけど…。
予想外過ぎると思いつつも、だからといってここで引き下がれば美穂奈は宿無しである。
なんとかならないのかと、美穂奈も食い下がってみる。
「えっと、理由を聞いても良いかしら？私、ラズが協力してくれないと、この世界に知り合いとかいないし、困るんだけど…。」
「わかってる、わかってるんだけど…。うーん…、弱ったなぁ。…

……ここ、僕の家じゃないんだよね。」

「……え？」

ラズの発言に美穂奈は一瞬固まった。
簡素なつくりのそれほど大きくない小屋。
ベットや食卓らしきテーブルがある事から、勝手に居住空間だと思い込んでいた。
そして、そんなところにいる一人の男。
当然、この家の持ち主だと思っていたのだが、違うの？
じゃあ、自分の家でもないこの小屋になんでラズはいるのだろうか？
…空き巣とか？
「あ、いや違った。えっと、僕はここに住んでるんだけど、この小屋は僕のじゃない…っていうのが、正しいかな。」
「あ、なんだ。借家って事？でも、だからって何で駄目？」
美穂奈の疑わし視線を受け、慌てて訂正したラズに、美穂奈はホッとする反面、更に首を傾げた。
居住人数に応じて家賃が変わったりするのだろうか？
「あぁ、うん。借家なら別に良いんだけど…。僕はちょっと特殊でね。」
「特殊？」
ますます意味がわからないと、美穂奈はさらに首を傾げながらラズを見上げた。
「あ…えっとね。僕は、その…国に保護されている立場だから。」
「保護？！」
言われた言葉に、美穂奈は驚きラズを見た。
「え、何？ラズって、天然記念物か何かなの？もしくは、人間国宝とか？」
「あ～、うん。どこから説明しよう…。」
そう言って悩むラズに、美穂奈は提案してみる。
とりあえず、どうしてこの家に居座っちゃいけないのかとか、保護

って何？とか、色々疑問はあるけれど。
「…そうね、ラズが良ければだけど。」
そこで一度言葉を切り、美穂奈はラズの灰緑の瞳を見つめて言った。
「最初から。一から全部、説明しれくれない？」
どうせ全部分からないのだから、この際一から全部説明してもらおう。
「急がば回れ。多分、それが一番早いと思うのよ。」

■■■■■■■■◆■■■■■■■■◆■■■■■■■

colors（カラーズ）。
それが、この世界の名前。
この世界の人達は個人差があるにしろ、皆魔法が使えるらしい。
そして、その魔法を使う時にもっとも大事なもの。
それが、自分の色（カラー）。
魔法を使う時に必要な魔力の色（カラー）は、皆それぞれ違っており、一人として同じ色（カラー）の人間はいないそうだ。
ただし、例外がある。
一人として同じ色（カラー）の人間は存在しないが、それは生きている人間の間で限定らしい。
死んだ人間の色（カラー）は、次にこの世に生まれてくる他の人間に宿るそうだ。
少し、地球で言うところの『輪廻転生』という言葉に似ていると、美穂奈は思った。
「そして、その色（カラー）は、遺伝されると言われている。」
「遺伝？」

「そう。例えば…。母親が赤、父親が青の色（カラー）を持っていたとする。そうすると、生まれてくる子供の色は母親似の赤系統か父親似の青系統、それとその2つを混ぜ合わせた紫系統の子供が生まれるのが一般的なんだ。」

つまり、血液型みたいなものかな。

美穂奈は心の中でそう呟き、納得した。

地球にはない概念だけども、似たような概念のものと上手く照らし合わせながら、ラズの説明を理解していく。

詳細は違うかもしれないが、今はとりあえず、大まかに分かっていれば良いと思ったからだ。

「でね、この色（カラー）なんだけど。特に貴重とされている色が4色あるんだ。4大原色って言って、赤・青・黄・緑は、特に強い魔力を持って生まれてくるとされている。」

「4？」

美穂奈は首を傾げた。

色の三原色。

光の三原色。

美穂奈が知る色の元というと、上記のものがすぐに浮かび上がってくるが、それはどれも三原色。

光の三原色、赤・青・緑。

色の三原色、マゼンタ・シアン・イエロー。

赤とマゼンタ、青とシアンを一緒と考えた場合、たしかに色はおおまかに4つにわけられると思うけど…。

「ミホナ？」

ラズが呼ぶ声に、美穂奈は首を振った。

「ううん。何でもないの。ごめんなさい、続けて。」

美穂奈の常識がこの世界で何になるというのか。

魔法だの色（カラー）だの言われているのだ。

3原色だろうが4大原色だろうが似た様なものだし、数字が1違うだけの細かい差異は無視する事に決めた。

「大丈夫？続けるよ？」
ラズの言葉に、美穂奈は黙って頷いた。
「色（カラー）は遺伝だけど、基本的に色転生（カラーてんせい）って言うのは、血の繋がりが濃いところを好むんだ。特に、４大原色はね。だから、何代にもわたり原色持ちが生まれなかった場合、どんどん原色持ちの子供が生まれる確率が低くなってしまうんだ。原色っていうのは、魔力が高いっていうのもあるけど、他にも全ての色の源となる色でもあるから、原色の子が生まれないのは色々な色（カラー）を生み出す可能性を潰す事にもなるんだよ。だから、原色持ちは国から重宝される。」
「へぇ…。あ、もしかして、ラズがその原色持ち？」
だから、『保護』なんて単語が出てきたのかと納得しかけた美穂奈に、ラズは苦笑しながら首を振った。
「残念ながら、僕は原色持ちじゃないよ。原色持ちになれる可能性もなかったな。僕の両親共に緑系統だったから、僕がなれる可能性があったのは緑の原色だけど、僕が生まれた時点では緑の原色持ちはまだ生きていたから。」
「えっと。じゃあ、どうしてラズは保護されているの？」
ここまでの会話の流れからして、原色持ちだから国から重要視され保護されている。
という結論に辿り着かないのは何故なのかと、美穂奈は首を傾げた。
「私の解釈が間違ってる？」
ラズの話をちゃんと理解出来てないのかと思ったが、ラズはそれにも首を振って答えてくれた。
「いや、大体はミホナの思っている通りだよ。まぁでも、別に原色持ちだからって、国に特別保護されたりはしないよ。貴重ではあるけど、閉じ込めて大事に大事にされたりとかはないから。僕の友達に、一人原色持ちはいるけど、危険な事をしても特に国に咎められたりはしないし。それは多分ね、原色持ちが死んでしまっても、また次の原色持ちが生まれてくるだろという考えがあるからなんだけど。『色（カラー）は巡り巡って、またこの世を彩るから。』っていう言葉が

あるぐらいだし。」
それだけ原色持ちが貴重だと国をあげて思っているのに、個を尊重し、原色の血は貴重だからと、種付け様に監禁とかしない国の方針には賛成だけども、なら何故、ラズは今原色持ちの人間に対する価値を説いたのか。
そこにはやはり、ラズと原色持ちがなんらかの繋がりを持っているからだろう。
どんな繋がりがあるのか、どういった可能性があるのか、自分ならどういう場合保護なんてするのかを美穂奈は考えてみる。
「……天然記念物。」
「え？」
美穂奈の呟きに、今度はラズが首を傾げた。
「そうよ、やっぱりラズは天然記念物なんじゃないかしら？」
パッと顔を上げた美穂奈に、ラズは眉尻を下げながら深く首を傾げてみせた。
「うんと、ミホナ？君がどこに着地したのか僕にはさっぱり分からないんだけど…？」
「天然記念物よ。知らない？この世界にはないのかしら。」
その言葉にラズが頷いたのを見て、また少し考えた美穂奈はニッコリと微笑んだ。
「じゃあ、今度は私の番ね。私の解釈が正しいかどうか、ラズに聞いてもらいたいわ！」
魔法も色も、４大原色も、色転生（カラーてんせい）も、何一つとして分からないけれども、ここまで説明をうけたのに、ただ最後に答えを聞いて終わりなのは何だか悔しい気がした。
ちゃんと、自分が出した結論があっているかの答え合わせをして欲しい。
だから、いきなりどうして立場が逆転したのか分からずオロオロしているラズを見て、美穂奈はもう一度ニッコリと微笑んだのだった。
「こうなったら、最後まで付き合ってね、ラズ。」

その有無を言わさない迫力の笑顔に、ラズは少しの間の後、無言で頷いたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5970y/

colors

2011年12月2日16時46分発行